

O2-006

乳児院における一時保護専用室の有用性について

新宅 可奈子

社会福祉法人四恩学園 四恩みろく乳児院

【目的】

当施設は2018年に建て替え、少人数制の6人部屋(ユニット)の環境が整備され、2021年から一時保護されてすぐの2週間、ユニットに移動する前の集中ケアを行うために専用室を設けている。専用室への入所期間中に丁寧に行動観察をし、ユニットへ移動する際に発達状況や生活の様子などの情報を伝え、移動後の養育が子どもにとって円滑に進むように連携を行っている。行動の客観的な指標として当施設オリジナルの行動観察シートを作成し、経過観察を行っている。今回は、その結果をまとめて報告する。

【方法】

質問紙：当施設で作成したオリジナル行動観察シート99項目(「子どもの心理面での「SOSサイン(126項目)」より、家族関係と具体的な身体症状などは除いた)

調査期間：2022年4月～12月

対象児：上記期間に当施設に入所した乳幼児14人(平均月齢：17.9ヶ月±3ヶ月)

[男子:7人,女子:7人](滞在期間 2週間:4人, 1ヶ月以上:10人)

採取時期：①入所時、②入所から2週間後、③ユニットに移動してから1ヶ月後

採点方法：各時期に担当職員とその部屋の責任者の2名に、「よく見られる：○」、「ときどき見られる：△」、「まったく見られない：×」を用いて記入してもらった。

分析方法：○を1点、△を0.5点、×を0点として換算し、各時期の2名の職員の平均値を算出し、性別、兄弟の有無、月齢、保育園の通園歴の有無、入所理由、父親の在・不在などとの関連を調べた。また質問紙の項目内容で【関係】【行動】【身体】【生活】【心理】の5つの領域に分け、分析を行った。

【結果】

各時期における各領域と合計の平均値を比較するために対応のあるt検定を行った結果、有意な差が見られなかった。次に[性別]などの要因における各領域の値を比較するために分散分析を行ったところ、[保育園の通園歴の有無]と【生活①、②】の間に、[性別]と【生活③】の間に、[月齢]と【関係③】、【生活①、②】の間に有意な差が見られた。

【考察】

初めの2週間では、[通園歴がある子ども]と[月齢が低い子ども]で、【生活】領域にSOSサインがより多く見られた。ユニット移動してから1ヶ月後では、[月齢の高い子ども]は【関係】領域に、[女子]は【生活】領域にSOSサインがより多く見られた。よって、一時保護専用室では月齢の低い子により丁寧に関わり、その後の集団生活で月齢の高い子や女子と意識して関わるのが重要であると考えられる。

O2-007

知的障害・発達障害のある思春期女子のための月経教育に関する研修プログラムの効果(第1報)

—教員向け研修会を通して—

津田 聡子¹、丸山 有希²、室加 千佳³
近藤 千恵⁴、高田 哲⁵¹ 中部大学 生命健康科学部² 神戸女子大学 看護学部³ 聖隷クリストファー大学 看護学部⁴ 上智大学 総合人間科学部⁵ 神戸市総合療育センター

【背景】

知的障害や発達障害のある女子の初潮年齢は、定型発達の子の初潮年齢とほぼ同様と報告されている。しかし、二次性徴によるホルモン分泌の変化のみならず、社会性に乏しく対人関係をうまく保てないために生じるストレスや、てんかんなどの併存疾患に対する薬の影響などもあるため、月経時のセルフケア確立には教師や保護者の十分な理解と支援が重要である。また、障害のある思春期女子の月経は個人差が大きいので、月経教育においては、個々の状態に応じて重点化と個別化を図る必要がある。しかし、これらの思春期女子に対する月経教育を具体的に学ぶ機会は少なく、多くの教員は戸惑いや不安感を抱いている。そこで、我々は障害のある思春期女子の特性や月経時の対応についてまとめた「月経教育マニュアル」を開発し、マニュアルを用いた教員向けの研修会を実施した。

【目的】

本研究では、研修会に参加した教員を対象に、教員の知識や自信を分析し、研修の効果を明らかにすることを目的とした。

【方法】

思春期や性・月経についての一般的な知識、障害のある子どもの月経についての知識、初経時や月経時の対応への自信の有無を、研修会の前・後、3か月後に調査・分析した。なお本研究は、中部大学倫理審査委員会の承認を得ている。

【結果】

研修前・後の調査は研修会に参加した37名から回答を得(回収率100%)、3か月後は19名から回答を得た(回収率50.0%)。参加者は、養護教諭が20名と最も多く、次いで大学教員9名となっていた。障害のある子どもの月経時の対応は、13名(34.2%)は未経験で、18名(47.4%)が経験していた。思春期や性、月経に関する一般的な知識は、研修前・後・3か月後において有意な差は見られなかったが、障害のある子どもの思春期や性、月経については、研修の前後で有意に高くなり、3か月後までその効果は維持されていた。また、障害のある子どもの初経準備、初経・月経時の対応についての自信は、研修の前後で有意に上がり、3か月後まで継続していた。

【考察】

障害のある子どもの月経時の対応経験がある教員は5割弱であり、研修前は障害のある子どもの性に関する知識や対応への自信は低くなっていた。しかし、特性を考慮した月経教育を受けることで知識や自信は向上し、3か月後まで維持された。これらから、研修には一定の効果があったと考えられ、障害のある子どもの性に焦点を置いて学ぶことの重要性が示唆された。